

# 青髭 9

明宏訊

そこはかたなく甘いアルアジミの花の匂いが城まで届いている。春の日差しはそれほど強くないはずなのに、部屋に入ってくる陽光はじりじりとアンリを熱してくる。

家臣の動揺に気付いたのか、カルッカソム伯爵は鷹揚に言った。

「余にも覚えはある。父親のことではだれしもこの国の男たちは苦勞させられる、貴族、平民の違いはまったく関係なくな…」

心無しか、文末にアクセントがあったような気がした。

この程度のことで反論するのは、臣下の分からいっても、あるいは、彼が常に自分に心がけていることからいっても、いま、彼がおかれている状況にそぐわないような気がした。

しかし、身体が勝手に反応していた。

「そうおっしゃられるにあたっては、それほど重要な要件ではないように思われますが？」

舌禍とはよく言ったものである。比喩ではなく、じっさいに言の葉が目の前で舞っていた。それはアルアジミの葉っぱだったから、もはや、春も終わってしまったのかとおもったほどだ。

しかし、彼の新しい主君はまったく意に介していないようだ。それは、もしかしたら、本当は家臣の無礼に怒り心頭なのだが、それを読み取れないアンリは未熟なのだろうか？これほどまでに高貴な青い血に従う家臣、それも重職を受け継ぐ資格がないということだろうか。

「か、閣下、おゆるしを…」

「なにを、ゆるせと？それならば余の方が逆に謝罪しなければならない。なんとなれば、そなたは全くと言っていいほど、この城のことを知らされていない。それなのに、よくやっている」

「はは…」

アンリは、平伏するよりほかになかった。

伯爵は、新しく家来となった若者の態度に満足したようすで、さらに畳み掛ける。

「そなたは、どうして平民がこの部屋にいるのか、もしも、そうなら余が大切な話をするわけがないというのだろうか？」

「……」

完全に心のうちを見抜かれていることにアンリは言葉もなかった。

風が入ってくると同時にアルアジミの青い花びらがアンリの顔をかすめた。まだ春も青く、花の盛りもいまだというのに気が早いとはこういうことだ。青年は主君の言葉を待っていられなかった。

「端的に言えば、アンヌは平民ではない、ということですか？」

伯爵の背後に控えている女官長と目があったのに、意識的なのか視線を外そうともしない。

「別にだますつもりはなかったのだ。たしかにそなたのいうとおりだ。そもそも、この城に平民は存在しない。いや、できぬように結界を張っている」

「なんですと？」

アンリの脳裡に、少年の赤い血が大写しにされた。たしか、ジャックとかいった下働きの少年、バラの手入れをしていた。彼の身体から流れる液体は確かに赤かったはずだ。

「あの少年は……」

その一言で伯はすべてを見通している。それはアンリも同様でまちがっても、主君が示した代物を別物だとは夢にもおもわなかったのである。

「これを見ているがいい」

「……!？」

伯爵が示したものは、赤などという貧相な色は何処にも見受けられない、真っ新なハンカチだった。もしも、あれが青い血ならばそうなるはず。乾けば透明になるのが彼ら貴族の血の習性ゆえだ。

「魔法の研究はさせているのだが、時間が経つと本来の性格を露わにしてしまう。ハムラビのやつも、あきらかに才能と給与に匹敵する仕事をしているとおもえん。いちど、喝を入れる必要がある」

「……………」

あのアンヌがかすかに微笑を浮かべたような気がした。この女に感情というものがあるとは初耳、いや初目である。いや、正しい言い方をするならば初見だろうか……。文法上の下らぬ詳細はあの啓蒙主義者どもに任せておけばいい……いや、待てよ。いま、新しい名前を聞いた。

発言の内容と裏腹に微苦笑すら浮かべている主君の、かたちのいい口元に絆されながら疑問をぶつけてみる。

「ハムラビとはどなたですか？」

「この城で魔術の研究を専門に行わせている異国人だ。第3回薔薇十字軍で捕虜にしたオリエントの貴族の末裔でね」

かつて、幼少時代に叩き込んだ歴史の教科書が自然に脳裡に浮かぶ。品詞が時間によって格が変化する、いわゆる時間変化をする複雑極まりない古代語に、泣きたい思いでかじりついていたものだが。もっとも、彼の性格からして外部の人間に内面を簡単にみせたりはしなかった。その点、弟のルイと好対照だった。

「たしか、300年前の引き渡し条約でお互いに虜囚を交換したはずでは？」

「文献によると、母国で罪を犯していてね、それが暴露されたせいで帰国できなくなったのさ。当時のカルッカソム伯は、彼の能力を重視して留め置いた、というわけさ、表向きには自死したということにして…あれから、月日経っているからね、混血が進んで外見的にはほとんどわれわれと区別がつかないが…」

これほどまでに饒舌な主君のようすに驚くアンリ。

アンヌのはなしはまだ終わっていないはずである。それなのに、べつの人物の話とは…

しかし、本来の話題の焦点に戻す必要性を強く感じた。

「青い血の方はどうなんです？」

「歴代のカルッカソム伯は、どこからかわからないが、貴族の娘を連れてきて、あくまでも自由意志で嫁がせたらしい」

「オリエントの連中と…本当ですか？自由意志というのは……」

いままで、自分たちを統治してきた殿様がこれほどまでに奇矯だとは夢想だにしなかった。ピエール4世王が異端視する理由もわからないでもなかった。頭の中を整理してみる。アンヌのはなしがあって、ギュスターブという魔法研究者、なんと異国人？そうだ、ジャックという少年も青い血の持ち主であって、その男の研究成果によって赤い血、すなわち、平民に見せかけていた、ということだ。

「ジャック…あの子供がまさか貴族などと…では、あの態度はどうなんですか？」

自分たちに向かって平伏した態度はいったい何なのだ。鎌首をもたげてくる疑問で胸がいっぱいになってくる。まさか、伯爵は芝居を命じたわけでもないだろうな…それを確かめるのは怖かったので、胸の内に秘めることにした。あとで見かけたら本人に直に確かめてみるつもりだ。

それにしても、さんざん自分のことが目の前で話題になっているというのに、このアンヌという女はまったく反応しない。さいしょに邂逅したときには、盲聾者だと本気で思ったくらいである。

「そなたは…いや、あなたは本当に貴族なのか？」

それは疑問形ではなかった。もはや、主君が認めているのだ。

「そのとおりです」

「……」

言葉というものに全く抑揚というものが感じられない。そこで畳み掛けてみることにした。

「あなたの本名は？差支えなければのはなしですが？」

貴族といっても、貴金属といっても金から銅まで種類が分かれるように、いや、それ以上に複雑怪奇な分類がなされている。そのうちのどれに位置するのかわからないので、敬語と通常の表現が混在してしまう。

アンヌは何の齟齬もなく言い切った。

どうやらファーストネームは本名のようなようである。その次に続く別種の名前たちの終わりに、青い血の称号であるドがついて、その次の門地名を聞いて、アンリは驚いた。

「ド・ロペスピエール…」

心なしか、それだけは微妙に感情が混じっているような気がした。当たり前だ。ギョイエンヌ従子爵家は、カルッカソム伯爵領内において名門であるが、ナント王国のなかではよくって二流の貴族にすぎない。しかし、その家は、王国創立以来、いや、伝説以来の名門なのだ。冗談も休み休みにしてほしい…とはアンリの素直な気持ちだった。

そんな彼の気持ちを汲み取ったのか、アンヌは、今度はせせら笑いながら言った。

「どうなさったのですか？アンリさま、門地で人をはかるのですか？それなら、何の問題もありません。わたくしたちは天下の反逆者なれば、改易にならなただけ、王家に恩がありますれば…」

「もう、よい。アンヌ…」

まるで、姪に話して聞かせる叔父の顔に、あの伯爵が変容している。泡を吹くかんじで、完全に言葉を失っているアンリを部外者に貶めて、二人は勝手にドラマを演じはじめていた。

そんな青年に追い打ちをかけるようにあざける声が響いた。

それは、彼が赤い血の平民とあれほど貶めていたジャックの声だったのである。